

【第二夜】

ブラームス：クラリネット三重奏曲 より 第1楽章（ヴィオラ版）

ブラームスは、1890年夏に完成した「弦楽五重奏曲 第2番」を最後に引退を決意していたが、クラリネットの名手リヒャルト・ミュールフェルトとの出会いをきっかけに、再び創作意欲を取り戻し、クラリネット室内楽の名品を立て続けに発表した。本作はそのなかでもっとも早くに書かれたもので、クラリネットのパートは作曲家自身の指示により、ヴィオラでも演奏される。第1楽章ではチェロによる愁いに満ちた第1主題が現れ、それをヴィオラが受け継ぎ、緩急をつけながらドラマティックに展開していく。

ヘンデル：歌劇《セルセ》第1幕 より「オンブラ・マイ・フ」

「オンブラ・マイ・フ」は、ヘンデルの歌劇《セルセ》（1738）の冒頭で歌われるアリア。ペルシャ王セルセが庭にあるプラタナスの木（スズカケノキ）の木陰を愛でて、「これほどまでに愛らしく、心地よい木陰（オンブラ）は、かつてなかった」と感謝を捧げる。

A.マルチェッロ：オーボエ協奏曲 より 第2楽章「ベニスの変」

アレッサンドロ・マルチェッロが作曲した「オーボエ協奏曲 二短調」は、バロック時代のオーボエ作品の中で最も有名なものの一つ。作曲時期は定かではなく、1717年以前とされる。全3楽章中、「第2楽章：Adagio」は最も有名な楽章。たゆたうような弦楽器の伴奏にのって、オーボエが美しく、哀愁を帯びた旋律を奏でる。なおこの楽章は、J.S.バッハが独奏チェンバロ用に編曲している。

N.コスト：山人の歌

「山人の歌」は、フランスのギタリスト兼作曲家のナポレオン・コストによるオーボエとギターのための二重奏曲。作曲時期は定かではないが、当時の名オーボエ奏者チャールズ・トリアベールとの親交から生まれた。大きく3つのセクションから構成されるが、通常、各部分は間断なく演奏される。「田園的嬉遊曲」という副題の通り、山の風景を想起させる牧歌的で優雅な作品である。

ラヴェル：《ドゥルシネア姫に心を寄せるドン・キホーテ》

本作は、1932年から翌年にかけて作曲された、バリトン（バス）と管弦楽（ピアノ）のための連作歌曲集で、ラヴェルの生涯最後の完成作として知られている。第1曲「空想的な歌」は、ドン・キホーテが姫への変わらぬ愛と献身を歌う甘美なバラード。第2曲「英雄的な歌」は、聖ミカエルへ祈りを捧げる、教会オルガンを思わせる荘厳な雰囲気のある曲。陽気でユーモラスな第3曲「酒の歌」は、酒がもたらす喜びを歌い上げるワルツ。

マスネ：歌劇《エロディアド》より「はかない幻よ」

歌劇《エロディアド》は、ジュール・マスネによる4幕6場のグランド・オペラ。1881年12月19日にブリュッセルのモネ劇場で初演された。「はかない幻よ」は、その第2幕に登場するバリトンのためのアリア。義理の娘サロメに心を奪われた王エロド（ヘロデ王）が、自身の苦悩と執心を歌い上げる。

シューベルト：八重奏曲

1824年にクラリネットの名手トロイヤー伯爵の依頼で作曲。伯爵は当時ウィーンで評判だった「ベートーヴェンの七重奏曲に匹敵する作品」を望んだという。こうして成立した本作は、編成こそヴァイオリンが追加されているものの、楽章構成など様々な点でベートーヴェンの七重奏曲を下敷きにしている。しかしシューベルトは、そこに抒情あふれる旋律を織り込み、交響曲を見据えたスケールの大きな響きを追求している。

全6楽章からなり、第1楽章は序奏を伴うソナタ形式。主題には自作の歌曲（「さすらい人」）を援用し、シューベルトらしい温かみを感じられる。第2楽章アダージョではクラリネットが叙情的な旋律を奏でる。初演ではトロイヤー伯爵がクラリネットを担当した。第3楽章は力強く活気あふれるアレグロ・ヴィヴァーチェ。トリオでは気分を変えて、優しい雰囲気満たされる。第4楽章アンダンテの主題は自作のジグシュピールから採られており、8つの変奏とコーダが続く。第5楽章は穏やかな舞曲調の主題によるメヌエット。第6楽章は、一転して嵐を予感させるような低弦のトレモロによる序奏で始まる。主部に入ると、トリルに飾られた第1主題とクラリネットによる第2主題とが躍動感に満ちた世界をつくり、目まぐるしい転調を繰り返しながら盛り上がる。展開部を経て、再現部のあと再び序奏の暗い影がよぎるが、最後は明るさを取り戻し、快活に締めくくる。